法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2024-12-27

夏期公開講座をふりかえって

安江，武夫

(出版者 / Publisher)
法政大学国文学会
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
日本文學誌要
(巻 / Volume)
8
(開始ページ / Start Page)
58
(終了ページ / End Page)
61
(発行年 / Year)
1963-01-25
(URL)
https://doi.org/10.15002/00019062

夏期公開講座をふりかえって

安江武夫

法政大学国文学会主催の日本文学夏期講座は、八月一日から隔日六日間、法政大学八三五番教室でおこなわれた。前例のない企画ではあったが、本講座はともかく大きな成功を収めた。その経過を以下まとめてみたい。

尚この経過報告書は、今後の資料としての意味もあるので、本講座の実行委員となった筆者のメモにより、準備の段階をふくめての一応の過程を明らかにすることにした。また本講座実行委員の名は、出来るだけ明記するようにした。その理由は、今後同じような企画をする時、第一回目の実行委員の経験が、一つの参考資料となるからだ。そして準備期間の経過は、すべて日取を明記したが、その理由もまた同様である。

準備期間の経過

五月二十六日（土）大学院二〇一番教室で国文学会幹事会が開かれた。この席上、小田切秀雄教授の発案で、夏期講座の計画がねられた。この夏期講座は、法政大学国文学会の一つの事業として計画された。そしてこの事業の成果が、国文学会の社会的責任のヴィジョンを決定する。われわれはそう解釈した。夏期講座はこうして決定された。講座を進めるにあたり、この幹事会で、以下の諸氏が、実行委員として選ばれた。阪下圭八（本学講師）、田中喜一（本学講師）、伊藤敬一（本学編集室）、鈴木穆（本学大学院）、安江武夫（本学大学院）、そしてゼミナール委員会の国文学会委員。

六月九日（土）この日雨模様だったが、再び幹事会がおこなわれた。この席上、講座テーマの内容をめぐって討論が成された。この幹事会は、出席者が少数だった。しかしテーマは、「万葉集」「源氏物語」「中世文学」「近代文学」にしぼられていった。この中から、われわれは、あらゆる条件を考慮した上で、「近代文学」をテーマとすることに、全員一致の賛成を得ることが出来た。

六月十一日（月）夏期講座の企画について、委員の討論がおこなわれた。講師の選定にあたっては、九日の決議にもとずいて、阪下圭八、鈴木穆、安江武夫の三名により、原案製作がすすめられていった。この原案は、小田切教授を中心に再討論され、原案製作者は講座日程の決定もかね、講師人選の整理にあたった。この日再び大学院ロビーでミーティングがおこなわれ、田中喜一、伊藤敬一の参加を得た。この討論の結果、さらに小田切教授の意見を加えて講座の具体的計画が成立した。

講師の交渉にあたっては、小田切教授の努力におうところが多かった。

そして一、二の変更のほかは当初予定した

通りに順調に進行した。あとは宣伝活動、会員券の配布を待つばかりとなっていた。会員券の金額の決定は、他大学の講座と考え合せた上で、通し券（六日間）学生三五〇円、学外一般七〇〇円、当日券（一回分）学生八〇円、学外一般一五〇円と決定した。学生券は、本学の学生を対象とし、通信教育の学生も、この範囲に含めた。これ以外は、他大学の学生も、すべて一般券を使用することにしたのである。

六月十三日（水）、ゼミナール委員会との打ち合せが成った。講座の宣伝活動は、この日事実上スタートしたと見たい。六月二十二日（金）、別表に示した講師全員が決定したのである。これで、一つの難所を超えた。あとは、われわれ自身の足が物をいうのだ。ところが、かんじんのビラとチラシの製作がおくれていた。これは本講座の準備期間中、最大のガンに数えられるだろう。六月二十五日（月）、すでに話のついていた法大出版局にポスターの製作を依頼した。次いで六月二十七日（水）、小田切教授の連絡で話のついた筑摩書房に、チラシの製作を依頼した。翌二十八日（金）手製の会員券が出来上り、配布の状態も一応整った。会員券の配布は、主として、ゼミナール委員一同におうところが多かった。

七月四日（水）、筑摩書房より、チラシが出来上って来た。われわれは、飛ぶ勢いで、宣伝に拍車をかけたのである。ポスターの製作は、尚おくれていた。これが、実行委員、ゼミナール委員を一汗かかす原因となっている。われわれは、まったく困ったのだ。ところで、この時期にいたり、本講座の責任分担が、まだ正式決定していなかったので、活動にひびいて来た。誰が責任者なのか。

これは或る意味で、講座実行委員の手落であったろう。そこで七月六日（金）、小田切教授を中心に、責任者の人選に入った。その結果、本講座の最高責任者に伊藤敬一、宣伝担当に鈴木穆、会計担当に安江武夫が決定したのである。この以後、宣伝は鈴木を中心にゼミナール委員会一同の努力で進められていった。ポスターは、七月十六日（月）にいたりやっとすり上った。講座を目前にすること二週間。これで宣伝がゆきとどくだろうか。

講座の経過

われわれは、以上の経過を経て、講座の当日を迎えたのであった。委員一同、腹の底に

法政大学夏期公開講座

—近代日本文学の特質を中心として—

第一日（八月一日）
宮沢賢治の世界　谷川　徹三氏
近代日本文学の構造　小田切秀雄氏

第二日（八月三日）
キリシタンと文学　堀田　善衛氏
プロレタリア文学の性格　小原　元氏

第三日（八月六日）
近代文学史に於ける短歌の意義　久保田正文氏

第四日（八月八日）
日本近代文学の性格　平野　謙氏
演劇史と文学史の接点　田中　喜一氏

第五日（八月十日）
鷗外と漱石　中野　重治氏
道元と現代文学　西尾　実氏

第六日（八月十一日）
昭和の「文芸復興」と現代　中島　健蔵氏

第七日（八月十三日）
近代日本文学とキリスト教　勝本清一郎氏
自然主義文学　猪野　謙二氏

不安をひめながら……。

八月一日（水）が来た。この日、受付に選ばれた者に、大きな仕事があった。それは、すでに配布した手製の会員券を、正式の会員券と引換することだった。期間がなく、暫定手段として、手製の会員券が出来たのだが――。しかし引換はスムースにいった。われわれはこの日、時間がたつにつれ、以外な結果を見るにいたるのだ。当初、まったく予想しなかったことが、一つの事実となってくる。ここで筆者は、講座そのものに立ち入る。

八月一日、約三八〇名の参加者を得た。これはおどろくべき事実である。この参加者の数字は、第一日目にして、講座全体の成功を物語るに充分だった。この日、会場に予定した八四五番教室は、参加者超満員のため、以後使用不可能な状態となったのである。意外な結果とはこの事だった。喜びの悲鳴が、実行委員、ゼミ委員の口から出る程だった。この結果から、われわれは以後の日程に自信を持つ事が出来た。そこで、会場を思い切って八三五番教室に変える事にした。これで、参加者を立ちん坊させずにすんだ。

しかし二日目以後、八三五番教室は、参加者にとって不快指数を露出した。それはこの会場のむし暑さだった。風通しが悪く、しかもしっ気の多いこの教室は確かに暑かった。この意味で、参加者にめいわくをかけた。講師の某氏は、話が終って出て来ると、こんな事をいった。「法政は暑いですな――。」それ程、この教室の不快指数は高かったのである。しかし、講座は順調に進んでいた。われわれは、暑いにもわわらず、連日つめかけた参加者の熱意に、深くうたれるところが多かった。この情熱を学ばなければならない。初日の成功は、以後の日の栄光を約束していたに違いない。

しかしこの講座の期間中、次のような経験があった。八月六日（月）に予定した講師中島健蔵氏は、この日原水協総会の議長団をつとめていた。この大会は、米ソ連の核実験をめぐり以外に混乱した。その模様は、テレビや新聞で明らかとなっている。このため、中島氏の講義は、一応延期せざるをえなくなった。現実の危機は、本講座にも反映して来た。そこで我々は、中島氏の休講について、当日の来講者に謝罪した上で、次のような処置をとることにした。本講座期間中に、もう一講座もうけること。そして、その日中島氏においでいただくこと。追加日の日程は十一日とした。この処置に、二三の不満はあったが、来講者の多くは、われわれを諒承してくれた。これは喜ぶべき事だった。期間中、われわれの手落ちは、この事をおいて、他にないのである。

講座をおえて

法政大学国文学会は、十三日で講座を終えた時、十七万七千百五〇円の総収入を得た。このうちかなりの出費もあったが、全体としては、約十万円の利益を得たのである。講座成金とでもいうべきか。こんな以外な数字を当初誰が予想したか。本講座の会計面を担当した筆者も、こんな収入金額を予想しえなかったのである。

講座の会期中得た参加者の数は、会計決算表に明記した通りである。われわれは、ここで、本講座の成功の原因を、次のように考えたい。

成功の第一条件は、企画の的確さにあった。第二は、テーマ「近代文学」にあった。法政の近代文学講座なら、一応信頼出来るという世評が、企画と一致したこと。第三には立ちおくれた宣伝が、ジャーナリズムを動すにいたったこと。即ち、朝日新聞をのぞき、

本講座の内容が、毎日、読売読書新聞、週刊読書人、図書新聞、東京新聞等の紙面を飾ったことである。そしてポスターが、人目に触れていたこと。以上のことがらを、われわれは数えることが出来るだろう。これは、宣伝に従事した者の、情熱の勝利である。

この講座を終えるにあたり、法政の国文学会も、単に法政だけの存在ではなくなった。大きく社会的なものに、一歩ふみ込んだのである。そうした社会的貢献を、この講座ははたしたはずである。この意義を、われわれは深くかみしめたい。

すでに書いて来た経過の中に、反省すべき事が何であるか、明らかになったろう。一つの講座は、約半年の準備期間がなければ、充分な宣伝が出来ない。われわれは、成功のかげに眠ってはいけない。会員券配布の問題、本学生以外の学生のたいぐう、そして国文学会とゼミ委員会との共同作業など、今後に残されたものがあることを、忘れてはならない。

以上をもって、経過報告は終る。すでに名前を明記した諸氏の他、本講座の進行にあたって、次の諸氏の協力は大きかった。国本、近藤、松原、藤木、浅見、勝元、橋本の諸君をはじめとするゼミナール委員会一同、教授室給仕諸君。それに正木信一、杉本圭三郎の両氏、また大学院から吉田恵美子氏。以上の諸氏の協力がなかったら、この講座は成功しなかった。ここに記して感謝する。

（なお講座の益金は、国文学会編「日本文学研究のための読書案内」およびゼミナール委員会編「ゼミナール報告集」の製作資金にあてられる。これらの本は日文科の全在学生に無償で配布されるはずである。）

――本学大学院修士課程在学――